れんさい

監査の四季

第31回

鯖江市代表監査委員
川中清司

未曽有の災害に復興の底力

7月18日の未明から、篠（しの）をつくような豪雨が襲い、山は鉄砲水で崩れ落ち、土砂は滝のように河川に溢れ、道路は川になって渦巻き家財や自動車を流していきました。

河和田・北中山・片上・中河の4地区に暴れ狂った濁流は、またたく間に軒下に迫り、床を越え、壁を破り、家財を押し流し、その被害総額は111億5千万円と推定されます。

濁流に沈んだ跡が赤茶けて、胸丈にくっきりと見える。道端に転がる泥まみれの赤いお椀が痛ましい。

床板をはがし泥を取り出す。35度を超す連日の猛暑のなかで、巻き起こる泥ぼこり、鼻をつく消毒の臭い、流れ落ちる汗、喉が干せ目がくらむ。30分とはもたない。1万1千人を超えるボランティアと、県内外の関係機関や自衛隊の懸命の活躍が続きました。

河和田小学校の校庭に運び込まれた災害廃棄物は山となり、その高さは校舎の屋根に迫り、それらを西番スポーツセンターや環境衛生センターに運搬し、分別処理を急いでいます。

厳しい財政に追い打ちをかけて復旧の支出はかさみます。

緊急対策の予算処置として、市税の減免や応急対策経費等で約7億8千万円を計上しました。

被災者住宅の再建補助金に4億円、事業復旧奨励金に5千4百万円、災害ごみや堆積した土砂の搬出、処分等の委託費などに2億円を盛り、国・県等の補助金のほか、基金を取り崩してこれにあてました。

「ものは流れても技術は流れない」と、服部寿一越前漆器協同組合理事長は再起を呼びかけ、「漆の里を守るため新たな出発点にしよう」と今、力強く第一歩が踏み出されました。

―8・30―

処理が進む災害廃棄物
（西番スポーツセンター）